UNA VOCE

マウリツィオ・バルバチーニ

Maurizio Barbacini

★指揮

3月の新国立劇場《運命の力》で初来日、来年1月には《ラ・ボエーム》で再来日

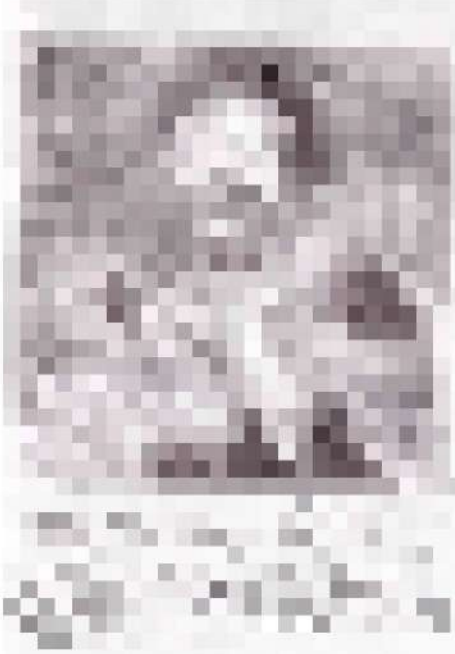
イタリアの歌劇場で鍛え上げられた、伝統的指揮者の最後の世代の1人であるバルバチーニ氏が、新国立歌劇場の《運命の力》のため初来日している。来日前にベルン市立歌劇場で同オペラを振った際にお話をうかがった。

「このオペラは非常に複雑で、演出も難しいと思います。ヴェルディのオペラの中では、オーケストレーションが貧弱な方なので、表情をつける必要があり、これが又難しいのですが、メロディとドラマに関しては天才的な作品なので、やり甲斐はあります。

私ははじめ、一卵性双生児の兄と共に歌を勉強しました。兄は先にテノール歌手としてデビューしていたので、作曲やピアノも勉強していた私に、彼が出来ない仕事を回してくれました。その後、私も《魔笛》では大成功を収めましたし、ゼッフィレッリのオペラ映画「椿姫」ではガストーネを歌っています。また、フィレンツェ5月音楽祭などで長いこと練習ピアニストや練習指揮者をしていましたが、マエストロ・サンティがパリのバスティーユ・オペラで《マノン・レスコー》を振った時、副指揮者に抜擢してくれたのです。それまで指揮者としての経験は皆無だった私が、その晩からいろいろな劇場のオファーを受け、指揮者としてのキャリアが始まったのです。

現在は、劇場内で必要な下積みを経験することなく指揮者になる人が増えています。交響曲はそれでも上手な音楽を作れるかもしれませんが、オペラは歌手を教えられないと上手くいきません。練習段階で何を歌手に与えられるか、そういうことを勉強できるのは劇場でのみです。歌手を上手く指導できれば、オペラは成功したも同然です。

私の生まれ育ったところは、ヴェルディの生地から20kmほどのところなので、彼のオペラは肌で感じ取ることができます。こんなことを言ったら他の指揮者から袋たたきに遭うでしょうが(笑)、私以外の誰が、こんなにヴェルディを近くに感じられるだろうか、と思いながら指揮しています」

テノールとしての経験を生かし、歌手をしっかりサポートしながら、皆から気軽に挨拶される、等身大のマエストロであった。

取材・文＝中　東生